
My hometown

岩田拓斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My hometown

【Nコード】

N8679U

【作者名】

岩田拓斗

【あらすじ】

満月の夜、人気のない中学校の近くで、鮮血が飛び散った。街灯の明かりが照らす中、殺人者は無言のまま立ち去った……。

警察は捜査を開始するが、そんな彼らをあざわらうかのように、第二、第三の殺人が行われていく。殺されるのはなぜかみな、不良ばかりだった。

被疑者視点で展開されていく、殺人事件です。

夢想

その夜は満月だった。路上は青白い月に照らされ、ぼんやりと道は浮かび上がっている。街灯は頻繁に明滅し、今にも消えそうである。

場所は賑やかな商店街から少し離れたところで、山の麓に近い。温暖化の影響か季節感を狂わせた鈴虫が懸命に鳴いていた。

相沢栄治は酔った身体を電柱に凭れかけさせながらゲーゲーと胃の中身を吐き出していた。金曜日ということもあって久しぶりに馴染みのバーで飲んだのだが、アルコールがやや強すぎたようだ。彼はぶつぶつと悪態をつきながら、腰元まで下げたズボンをずり上げた。

そんな彼を見つめる者がいた。そいつは、アスファルトに舗装された道の向こうからゆったりとした足取りでやってくる。相沢はその影に気づくと、警戒心を起こした。こんな時間に普通の人間は歩かない。もう12時は過ぎたんだぞ？　どこだってパーティは終わってるはずだ。

一瞬だけ、街灯に再び灯りがともった。影の正体が明らかになった。

そいつは煌々と光る黒髪に、鳶色の瞳を持っていた。西洋人のように高い鼻に薄い唇。長身で、しなやかな身体を優雅に揺らし、ゆっくりとこちらに歩いてくる。グレイの背広をきちんと着こなしていた。彼はこちらに気づいたかのように立ち止まると、相沢のほうをじっと見つめた。

「なんだよ、見世物じゃねえンだよ。とっとと失せな」

正体さえ分かれば、どうということはない。相沢はつんと鼻を突く酸の臭いを口から吐き出しながら喚いた。

背広の男はそんな彼の脅しに反応するわけでもなく、じっと彼を見つめていた。その蔑むように羨むような視線に、相沢はきれた。

「ふざけんじゃねえぞ、てめえ！」

相沢は男に向かって殴りかかった。スピードも威力も申し分ない。かわされるはずなどなかった。

それをサイドステップで軽々とかわした背広の男は、無防備な相沢の腹に蹴りを叩きこんだ。思わず身体を折る相沢の首筋に手刀を叩きこむ。首の骨をこきりといわせ、相沢は無様に地面に這い蹲った。げほげほと咳き込みながら、またも口から胃液を逆流させ、相沢は声にならない悲鳴を上げた。

その様子をじっと見つめていた男は、やがて屈みこむと、相沢の後ろ髪を引っ張ると、ぐいと引っ張った。相沢は顔に恐怖の色を浮かべ、見開いた目に男の顔を焼きつけた。

男はポケットをこそこそと探ると、バタフライナイフを取り出した。それを高々と掲げる。ナイフは街灯の光を反射し、ダイヤモンドのように煌めいた。

相沢の喉笛にナイフが突き刺さる。相沢の身体が痙攣した。強烈な勢いで刺さったそれを、男はさらにぐりぐりとねじ込む。相沢を押さえつけながら、彼の後ろに回り込むと、男は柄を横に引っ張りながらナイフを引き抜いた。夥しい量の鮮やかな血がぱつと、アスファルトに飛び散った。相沢の身体から力が抜けていく。男は返り血を浴びないように相沢の身体を支えた。

相沢の息の根が止まったのを確認した男は、そのまま立ち去った。街灯の光だけが、相沢の軀を見下ろしていた。

青春

朝倉健吾は午前六時に目が覚めた。クロゼットから夏服を取り出し、ボタンは全て止める。校則では第一ボタンは外してもよかったが、彼はあえてボタンを全て止めていた。

簡単な朝食――パンと牛乳とキャベツの千切りの載った目玉焼き――を五分で食べ終えると、不必要なほど重い鞆を持ち上げ、ふちなしの伊達眼鏡をかける。家を出る前に姿見で自分の恰好を確認した。きっちり寝かしつけた髪。やや顎を引き、ひ弱そうに見せかける。鏡の中の自分の笑いかけ、すぐにその表情を消す。満足した彼は重い扉に体当たりし、玄関を出た。

安物のアパートを出て五分、背中を丸め、上半身を左右にふらつかせながら、朝倉はホームに立っていた。気弱そうな顔に自信というものは欠片も表れていない。

「よう、朝倉」

そんな彼の肩を叩く者がいた。朝倉は反射的に振り替えると、頬を人差し指でつつかれた。よくある引っ掛けだ。こんな子供っぽいことをするのは松井しかない。松井雄二、朝倉の中学校自体の友人である。ワックスをつけているわけでもないのにてかてかと光る黒髪に、人を威圧するような吊り目、鼻は何かを自慢するかのようが高く、口元は誰かを馬鹿にしているかのように緩んでいる。朝倉は貧弱な笑みを浮かべ、彼に答えた。

「ああ、松井……お前は朝から元気だな」

「今元気じゃなけりゃ、何時元気になるってんだ？ 放課後か？」
松井の豪快な笑いに追従するように、朝倉も笑って見せる。

電車が滑り込んできた。朝倉と松井は喋りながら学生ばかり乗っている車両に乗り込む。松井は自嘲するかのように唇を歪め、朝倉に話しかけた。

「聞いてくれよ、朝倉。俺今攻略しているゲームでさ……」

松井の滑舌の悪い声は聞き取りづらく、朝倉は同じ話題を三回ほど聞き返す羽目になった。結局彼の言いたかったのは、今攻略中のゲームが行き詰った、ということだった。朝倉は曖昧に頷いて見せ、おざなりな返事を返す。乗った駅から数えて二つ目に停車する駅で朝倉と松井は降りた。

同じ駅で降りたといっても、出る場所は違う。朝倉は西口で、松井は東口だった。じゃあまた今度な、夏休み辺りに会おうと約束し、松井は長い階段を下りて行った。朝倉も媚びるような笑みを浮かべていたものの、すぐに笑みを消すと、能面のような無表情を顔に貼りつけ、西口に続く階段を下りた。改札を抜け、堀川の横の狭い道を横に大きく広がり、のろのろと進む一団を早足で追い抜くと始業の十五分前に学校に着くことができた。

退屈な授業は受けるだけで苦痛なものだ。朝倉は頬づえをつき、精一杯聞いているふりをしながらシャープ・ペンシルを動かした。黒鉛はこんな文字を描き出した。

『反抗期』

朝倉はその文字に微笑した。思わず漏れそうになった笑い声を手で押さえたが、少し遅かった。

「朝倉、何がおかしい？」

静かな声に朝倉が顔をあげると、英語の教師がこちらを睨みつけていた。黒い瞳は死んだ魚のように光を失っていた。

「……いえ、なんでもありません。今後気をつけます」

朝倉は立ち上がると教師に一礼し、もう一度座り直した。絵に描いたような礼儀正しさだった。周りの生徒がざまあみろと言わんばかりに彼を嘲笑った。

授業を終えると朝倉はすぐに高校を出た。ちょうどやってきた電車に乗りこみ、一刻も早く家に帰りたいかった。

電車が駅に着き、どっと流れだす人込みの先頭で、朝倉は改札を抜け、自分のおんぼろのアパートの戸を開いた。制服を脱ぎ捨て、グレイの背広を取り出した。

伊達眼鏡を床に投げ捨て、長軀をなんとかスーツに収めると、朝倉は洗面所の姿見の前に仁王立ちした。今度は背筋をすっかり伸ばしており、表情も自信に満ちあふれていた。知人でも同一人物だとは気付くまい。朝倉は朝やったように鏡に微笑した。

玄関を片手で開き、正面に表れた斜陽に手をかざす。優雅な仕草で階段を駆け降りた時、こちらに向かつて歩いてくる不良の姿が見えた。朝倉と不良は一瞬、視線を交わした。不良は鼻を鳴らし、朝倉を無視して立ち去った。

朝倉は慎重に、その男を尾け始めた。

反抗

不良は商店街に入ると、背中を丸めて煙草をふかし、人込みに逆らって歩いていた。煙がもうもうと出る安物の煙草に、見るからに不良と分かる目つきと服装をしている彼に近寄ろうとする人間はおらず、自然と人込みは彼を避けるような形になった。彼は満足そうに、ニコチンで変色した歯をむき出して笑った。朝倉は眉に寄せた皺を一層深いものにした。

不良は商店街の一角にある大きなゲームセンターの敷居を潜った。朝倉も彼の後に続く。店員が恭しく頭を下げた。不良は真っすぐにインベーダー・ゲームの機器がある区画へと向かった。朝倉は不良の様子がよく見える、ブロック崩しのゲームの前に陣取り、百円玉を投入した。ゲームセンターなど初めて入ったが、簡単に高得点をたたき出した。

ざわめきに振り返ると、自分の後ろには人だかりができていた。自分が注目されていることに気づくと、朝倉はわざとミスを連発し、自機を自滅させた。観客はつまらなそうに立ち去って行った。

肝心の不良は、どうやら不調らしい。ゲーム機を罵りながら、壊してしまいうような勢いでボタンを連打し続ける。最後に、画面を殴りつけた。どうやら金が切れたらしい。近くを歩いていた少年に近寄ると、その小さな肩に腕を回し、店外に出て行った。そしてすぐに、上機嫌で戻ってきた。両替機にむかってスキップしている様子を見ると、相当の金をせしめたのだろう。

朝倉の握りしめたスティックが、異音を発してへし折れた。その音は他のゲームの音に混じって、朝倉以外には聞こえなかった。

暫くして彼らはゲームセンターを出た。朝倉は三百円ほどしか使っていないが、不良はかなりの額を使っただろう。もうすることもないはずだ。このまま、夜のドライブに出かけるか、家に帰るかのどちらかといったところか。

朝倉は不良が直進を続けているのを確認すると、違う路地に入り、一気に駆けだした。路地を出ると、先周りに成功したらしい。不良はこちらに向かつて、交差点を横切るところだった。

朝倉は落ち着き払った態度でポケットに手をつ込むと、左肩で不良にぶつかっていった。その瞬間、目にもとまらぬ速さで不良の左胸にナイフを突き刺した。不良は大げさに悲鳴を上げたが、それはいつものように金を巻き上げるための演技にすぎないだろう。まだ自分が刺されたことにすら気づいていないようだった。

「おいテメエ、どうしてくれるんだよ」

「あ、どうもすみません」

「すみませんじゃねえよ、今ので骨が折れ……」

そこまで言うと、不良は突如崩れ落ちた。がっ、という奇妙な声をあげて必死にナイフを抜こうとする。暫く地面を転げ回ったが、じきに死亡した。朝倉はナイフを取り返すと、不良のきた道をまっすぐに歩いて行った。

不良の死体は交差点の中央にある、冷たいマンホールの上に転がされていた。

操作

一ヶ月が経過した。朝倉は久しぶりにグレイのスーツを着込むと、家を飛び出した。やや逆立った髪がビジネススーツに不思議と似合う。朝倉はポケットに忍ばせたナイフを愛撫しながら、雑踏に飛び込んだ。

これと言って不良らしい人物を見かけないが目つきや柄の悪い連中は数人見かけた。朝倉は彼らの顔を徹底的に叩きこむと、処刑リストに付け加えておいた。

今日の街は、大人しいな……

朝倉はいつものように家路を急ぐサラリーマンを肩で押しのけ流れて逆らいながら歩いた。買い物帰りのよく肥えた主婦が最近の若者はこれだからと言いたげな目で朝倉を睨みつけたが、注意する気はなかったらしい。朝倉が睨み返すと、主婦はたちまち目を逸らした。朝倉はやれやれとばかりに両手を広げ、狭い路地に逞しい身体を押しこんだ。

路地はひどく入り組んでおり、生ごみが散乱していた。その悪臭に顔を顰めながら革靴でそれを踏みつける。乾いた音が響き、魚の骨が折れた。

もう少し路地を進んだところに、つんと鼻を突く塗料の臭いがした。シンナーだ。シンナーを吸っている人間がいるのだ。朝倉はそこに向かって駆け出した。

少し開いたところに、数人の若者が屯していた。皆瞳孔が開ききっており、麻薬中毒者だと一目でわかる。恍惚とした表情の学ランを着た男に向かって、朝倉はにじり寄った。手にはライターをしっかりと握りしめている。退路は確保してあった。

「煙草、吸うか？」

男は呆けた顔で頷いた。

「そうか……」

朝倉はライターを男の口元に近付け、ぐっと身を引きながら言った。

「じゃ、存分に味わえ」

ライターを、点火した。

その途端、ライターの火は気化したシンナーに引火し、ボンという音を立てて爆発した。男の顔はあっという間に炎に包まれた。朝倉は素早く身を翻すと、踵を返した。

男の悲鳴は聞こえてこなかった。シンナーで感覚が麻痺しているらしかった。

後日朝倉は、新聞でシンナー遊びをしていた少年が火傷で死亡したことを知った。朝倉は軽く肩をすくめて、新聞を閉じた。

本音

シンナーの一件はともかく、不良を二人も同じ地域で殺害しておいて、警察の手が伸びないはずがない。朝倉の持ち前の狡猾さが、彼の行動をより一層慎重にさせた。猫背の時間が長くなり、背筋を伸ばす度に骨が鳴った。

警察の捜査から逃れるため、暫く殺人をやめていたのだが、殺人願望というのは意外に大きなものらしい。日々の生活を過ごすうちに何度も夢を見たが、それはやはり、ガラの悪い不良をナイフで殺していく夢だった。いつの間にか、手段が目的になっている。そんな自分に苛立った。鞆を放り、伊達眼鏡も床に叩きつける。指紋やフケでレンズが汚らしくなっている。朝倉はそれを足で蹴飛ばした。眼鏡は吹っ飛び、壁にぶつかって畳の上に落ちた。

背広に着替えて街を出る。最近はサングラスも掛けるようになった。一応用心に用心を重ねて、ということなのだが、逆に人目を引くような気がしてならない。

朝倉はシンナー遊びをしていた連中が屯していた路地に足を踏み入れた。そこには誰もいなかった。流石に人が死んだ場所でシンナーなど吸っているとバッドに入ってしまうからなのだろうか？　なにせよ、朝倉には関係のないことだった。

その時、何かを踏みつけたような足音が響き、朝倉は振り返った。数人の不良が、彼の後ろに佇んでいた。どうやら獲物は向こうから来てくれたらしい。朝倉は肉食獣のような笑みを浮かべた。

「何がおかしいんだ？　兄さんよお」

へらへらとした笑みを浮かべ、不良の一人が馴れ馴れしく朝倉の肩を叩く。朝倉は容赦なく男の腹に拳を叩きこんだ。強烈なボディブローが決まり、不良は身体をくの字に折りながら倒れた。

「何しやがる、てめえ！」

「生きて出られるとは思うなよ！」

口々に喚きながら男たちは朝倉に飛びかかってきた。朝倉はボクシングのファイティングポーズをとると、顔面を殴ると見せかけ、二人目の男の腹を殴りつけた。少量の胃液を吐きながら男が転倒する。

三人目の男の股間に膝蹴りを喰らわせた。あまりの痛みに股間を抑えながら男がうずくまる。その顔面を思い切り蹴飛ばしてやった。男は鼻血を出しながら気絶した。

四人目の男は逃げ出した。朝倉はその男を無理に追うことはないか、と思いつつ、背広のポケットからナイフを取り出した。うんうんと唸って地面に転がった男たちに優しく声をかけてやる。

「安心しろ、今楽にしてやる」

ナイフが閃き、男たちの頸動脈はすっぱりと切断された。血飛沫が路地に飛び散る中、朝倉は早足で路地を駆け抜けた。これで警察はさらに警戒を高めるだろう。だが、これは続けなければならないのだ。朝倉は走りながら、そう自分に言い聞かせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8679u/>

My hometown

2011年8月21日03時13分発行